

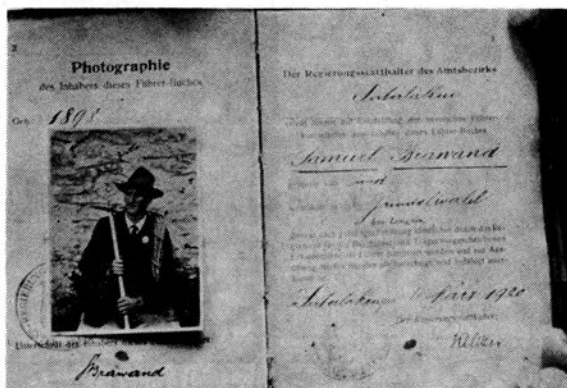
数年前、信濃支部の友人とグリンデルヴァルトを訪ねた折、お会いできず戻って来たので、今度こそはぜひお会いしようと、カンデ

＜初めて公開される貴重な資料＞

ブラヴァンド氏の山案内人手帳(1)

——スイス・ガイドと日本人——

岡 沢 祐 吉



＜山案内人手帳＞第2～3ページ

ル谷の友人宅から手紙を出して頂いた。数日して、友人の妻君がブラヴァンド氏の電話を取りついできた。一瞬緊張したが、日本で想

像していた程には緊張感がなかった。恐らくそれはブラヴァンド氏の人の柄のせいだったと思うし、またスイス仲間の人間関係のなせる技だったかとも思う。

数年前、田口さんが「山岳」に書かれたブラヴァンド氏所有の山案内人手帳を、私が見ることに。うとうとは夢にも思わなかった。確かあのとき田口さんは「すり切れた手帳のページ」という風に表現されていたが、赤い表紙のその手帳は、紙の色こそ変っていたが、大切に保存されていた。見せていただいた古いアルバムとともに、複写することを快く承諾してくれたブラヴァンド氏は、自分でページをめくり、採光に気をつけ、丁寧に両手でページを抑えたりもしてくれた。

このような思わぬ結果となった理由を説明することは、極めて重要なことなので、ここでいっつまんで説明しておきたいと思う。

昭和三十三年(一九五七年)暮、スイスの山友達からブントという新聞が送られてきた。スポーツ欄には、アルパインクラブ百年祭の帰途、グリンデルヴァルトに立寄られた横さんをインタビューした記事が載っていた。

「何故日本アルピニズムの父と言われるのか」という記者の問いかけに「恐らくそれは間違いないであろう」と横さんは答える。「でも横氏は自分がグリンデルヴァルトから戻って、本場のアルプスの技術を日本の仲間たちに教えたということとは信じている」、そして「スイスの友達たちはザイルさばき、ピッケルの使い方、登攀テクニク、氷のテクニクを彼に習熟させたばかりでなく、彼により以上のものを与えた」とし、「スイスに生

山をきれいに「三」は持ち帰る

きていて、人間から人間へと清い友情を通じる美しい登山者魂によって、彼は貫かれていた」とその与えられたものが何かを説明している。そして終りに、横さんが大切だと考えているのは「日本の登山者がたがたびスイスアルプスを訪ね、経験の深い一流の山案内人から新しい技術を教えられ、美しい登山者魂を仕込まれること」と結んでいる。この記事の中で、横さんとスイスの山友達との間の三十年間続く友情の絆を登山者魂の結果として高く評価してあった。

敗戦から立ち上って、急速な復興を遂げ、経済大国とまで言われるようになった日本に、この地味で、堅実な歩みが続けるブントという新聞のことを知っている者はほとんどいない。前述のこの記事に一貫して流れている格調の高さは、日本で知られる機会の少ない小新聞に載っていただけに、当時学生であった私には、ことのほか印象強いものとして扱えられた。

SACクラブフューラーの邦訳も、こういったことが引き金となったわけである。寡黙な横さんについて日本で語り足りないことを、この新聞記事は充分すぎるほど語っていた。ブラヴァンド氏は先刻承知のことであり、この記事



昭和53年(1978年)

12月号(No. 402)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目 次

- ブラヴァンド氏の山案内人手帳(1)
(岡沢祐吉)(1)
- 新選 覆刻 日本の山岳名著
全20点29冊の完成(近藤信行)(2)
- 刊行のことば(西堀栄三郎)
推薦のことば(三田幸夫・渡辺公平)
- 今西錦司先生日本一千山登頂祝賀会
—その人と魅力—(岩坪五郎)(5)
- 木暮翁生誕記念碑(山崎安治)(7)
- 東西南北(8)
- お知らせと報告(8)
- 図書受入報告(9)
- 1978年発行会員名簿脱落名簿(10)
- 1978年発行会員名簿正誤表(10)
- 会務報告・ルーム日誌・会員動向(11)
- カット/松本慎太郎

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜	10時～20時
水、金曜	13時～20時
日曜・祭日は休み	
▶図書室開設時間	
日曜・祭日・月曜を除く毎日	
	13時～20時



<山案内人手帳>第7ページ

を読まれてもいたようである。
「今、われわれの技術をもってすればあんなところは訳もない」そう豪語する若者がいた。彼の失っているものが形を成さないものだけに、私は危険を感じた。そこには無秩序と虚無のにおいが漂っているように私には思える。

全部で二〇〇ページもあるこの手帳の中から、短時間のうちに、準備もなく必要なものを選び出すのは容易でなく、ブラヴァンド氏が選んでくれたもののみをスライド用フィルムに納めた。このため、抜けているものもあるようだが、どうかご容願したい。

山案内人手帳第二ページの写真がブラヴァンド氏が二十二歳の時、山案内人のパテントを得た時写したものである。三ページはベ

ージそのものが公式の証明書になっており、インターラーケンの所轄官庁ゴム印と、責任者の署名がしてあり、山案内人手帳と資格証明書が一体となっていることがわかる。証明された日付が一九二〇年三月六日とあるので、横さんがグリンデルヴァルトに入られた翌年に、ブラヴァンド氏は正規の山案内人となったわけである。二ページの写真の左上にある数字は生年であるから、ブラヴァンド氏は一八九八年生れということになり、横さんとは年齢差が四歳ということになるらしい。ブラヴァンド氏と私の話の中でブラヴァンド氏は、大きな手を私の方に伸ばし、親指、人差指、中指と起し、彼とは三歳違うと言っておられたが、数え年とか満年令とかで、数え違いされていたのではないかと

『新選 覆刻 日本の山岳名著』

全二十点二十九冊の完成

近藤 信行

十二月二日の年次晩餐会でこのたび完成のはこびとなった『新選 覆刻 日本の山岳名著』全二十点二十九冊を展示することができて、ようやく肩の荷をおろしたような気分ではっきりしている。

日本山岳会の創立七十周年を記念して、『覆刻 日本の山岳名著』を刊行したのは、昭和五十年十二月のことだったが、その続編ともいうべき今回の『新選 覆刻』の編集に着手したのは、翌五十年四月のことであった。『日本風景論』『日本山嶽志』『日本アルプス』全四巻などをはじめとする全十八点二十二冊をまとめあげて、ひと思ったところへ、第二期の計画がもちあがってきたわけだが、たちまち再版、三版におよんだ前回の好評に気をよくしてとりかかったのではなかった。むしろ覆刻制作のむずかしさ、苦しみを経験したあとだったので、おいそれとかんたんに進行しなかったわけである。しかしぞくぞくと寄せられてくる読者カードを読んでいると、購入してくださった会員諸氏をはじめ大多数の読者がこの企画をよここび、続刊への大きな期待をもっておられることを知った。したがって、『新選 覆刻』の編集は、読者の要望にこたえるところから発足したのである。

島田巽、串田孫一、山崎安治三氏ともどもくりかえし編集会議をおこなった結果が、この二十点二十九冊である。その過程にあって、熊原

政男氏、吉田武三氏は多大の尽力を惜しまれなかったし、著作権所有者、研究者、蔵書家諸氏もこの企画の進行にこころよく協力してくださった。厚く御礼申し上げる。その全容および価格などを紹介すると、つぎのとおりである。

全巻内容

企画・編集 日本山岳会

△編集委員▽島田巽・串田孫一・

山崎安治・近藤信行

制作・刊行 大修館書店

〔収録作品〕

谷文晁『名山図譜』全三巻 文化二年

播隆上人『迦多賀岳再興記』 文政六年

播隆上人『信州鎗岳畧縁起』 天保五年

松浦武四郎『石狩日誌』 万延元年

松浦武四郎『山岳紀行六種』(乙酉掌記)『乙酉後記』『丙戌前記』『丙戌後記』『丁亥前記』『丁亥後記』明治十八年・二十年

高島北海『歐洲山水奇勝』全二巻 明治二十六年

年 金港堂

野中至『富士案内』明治三十四年 春陽堂

河口慧海『西藏旅行記』全二巻 明治三十七年

博文館

小島鳥水『山水無盡藏』明治三十九年 隆文館

鹿子木員信『ヒマラヤ行』大正九年 政教社

東大山の会編『剱沢に近ける人々』昭和六年

梓書房

吉江喬松『山岳美観』昭和十年 協和書院

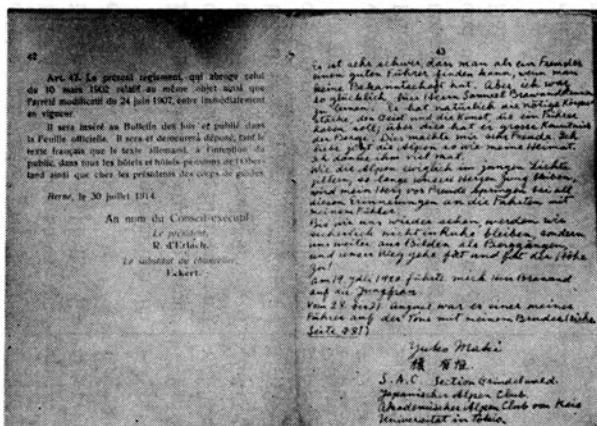
尾崎喜八『山の絵本』昭和十年 朋文堂

大島亮吉『先蹤者』昭和十年 梓書房

京大白頭山遠征隊編『白頭山』昭和十年 梓書

房

小島鳥水『アルピニストの手記』昭和十一年

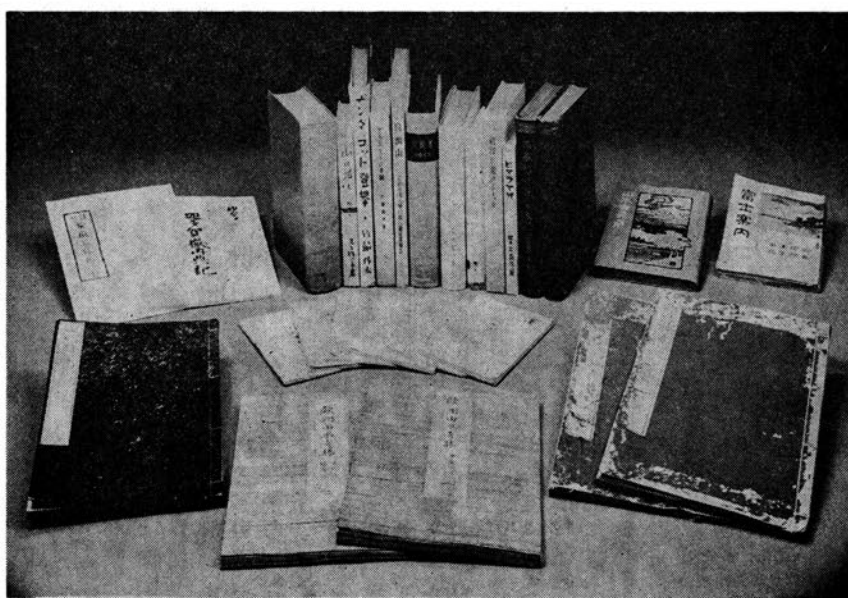


＜山案内人手帳＞第43ページ横有恒氏が書いたドイツ語

Es ist sehr schwer, dass man
als ein Fremder einen guten Fuß-
her finden kann, wenn man
keine Bekant-
schaft hat. A-
ber ich war so
glücklich, hier
Herrn Samuel
Brawand ken-
nen zu lernen.
Er hat natur-
lich die nötige
Körpärstärke,
den Geist und
die Kunst, die
ein Führer ha-
ben soll: über
dies hat er gro-
sse Kenntniss
der Berge, dies

七ページは一級のバテントを得たときの証明である。その日付は一九二六年七月三十一日とある。これは秩父宮がスイスアルプスへ登られた年ということになる。五ページは七ページと同じような形式で、二級のバテントを証明したものであったが、ブラヴァンド氏はこのページを割愛した。山案内人という資格が職業として確立し、この資格証明が山案内人組合からではなく、国の地区行政官から与えられていることを知れば、一級のバテントの重みがよくわかる。

荷物運搬人規則がスイスの公用語で印刷されてあった。
最初の客、横有恒氏
それから四十三ページ。この手帳を交付され、始めての客が書き込むべきページである。横さんが最初の客であったことの証明でもある。一年たらずの間に、日本語の通じない当時のグリンデルヴァルトにあって書かれた、この立派なドイツ語をみれば、すべてに周到であった横さんの心構えを知ることができると思う。



新選覆刻日本の山岳名著（写真は原本）

【価格】金十七万五千元（全巻一括配本）セツト販売につき分売はしない。購読者特典および別途分割払いの方法あり。
十二回 一九〇、五〇〇円
二十四回 二〇五、六〇〇円
編集・制作について
編集・制作にあたっての委員会の根本方針は、前回とおなじように「優れた文化遺産を正しく継承し、初版原本の型態を現代の技術および資材によって忠実に再現すること」であった。もちろん可能なものもあれば不可能なもの

書物展望社
竹節作太「ナンダ・コット登攀」昭和十二年
大阪毎日・東京日日新聞社
足立源一郎「山を描く」昭和十四年 古今書院
Walter Weston: Playground of the Far East, 1918, John Murray
〔別巻〕
中村清太郎「山岳礼拝」(新編集)
大修館書店刊 A5判 五五二ページ 図

版多数入
〔特別資料〕
日本山岳会「会報」第一〇一号〜第二〇〇号
昭和十六年〜三十三年
播隆上人筆「鎗ヶ岳絵図」天保六年
〔付録〕
「新選覆刻日本の山岳名著 解題」A5判四三二ページ 図版多数入
《執筆著》西堀栄三郎 串田孫一 山崎安治 熊原政男 吉田武三 宮下啓三 大森久雄 栗師義美 近藤信行 雁部貞夫 渡辺公平 望月達夫 今村正二 島田巽 山本良三
(以上十五名、目次順)

machte mir sehr Freude. Ich liebe jetzt die Alpen so wie meine Heimat. Ich danke ihm einmal.

Wie die Alpen ewiglich im jungen Lichte zittern, so lange unsere Herzen jung bleiben, wird mein Herz vor Freude springen bei all diesen Erinnerungen an die Fahrten mit meinem Führer.

Bis wir uns wieder sehen, werden wir sicherlich nicht in Ruhe bleiben, sondern uns weiter aus Bünden als Berggänger, und unser Weg fort und fort die Höhe zu!

Am 19. Juni 1920 führte mich Herr Brawand auf die Jungfrau.

Vom 28. bis 31. August war er einer meiner Führer auf der Tour mit meinem Bruder. (Siehe Seite 48!)

Yuko Maki
S.A.C. Sektion Grindelwald
Japanischer Alpen Club
Akademischer Alpen Club
von Keio Universität in
Tokio.

「知り合いがいなくて、土地不案内の者が良い山案内人を見つけることは大変にむずかしい。ここでサムエル・ブラヴァンド氏と知り合いになれたのは実に運が良かった。私にとってより以上にうれしかったのは、彼が山案内人として

備えなければならぬ頑強な体躯や精神、そして技術の外に、山についての知識が大変豊かなことだった。今の私は故郷と同じようにアルプスが好きだ。彼には幾重にもお礼を言いたい。永遠にアルプスが若々しく光り輝くかぎり、私たちの心にはいつまでも若さが留まり、山案内人と共にした、どの山行を思い出しても、私の心は喜びに躍ることだろう。

また会う日まで私たちは休むことなく、より一層、山に登る者として修練し、高みへと前進するだろう。

ブラヴァンド氏は一九二〇年七月十九日私をユングフラウへ案内してくれた。

八月二十八日から三十一日までの山行で、私のガイドの一人だったブラヴァンド氏は、兄と行を共にした。

(四十八ページ参照)
榎 有恒
スイス山岳会
グリンデルヴァルト支部
日本山岳会
東京在
慶応大学士山岳会
一九二〇年十月十四日

記入の日付が十月十四日となっているが、どのページもその年に行われた山行がまとめて記され、客ごとにページを割いているようである。ブラヴァンド氏が強調さ

もあるのだが、巷間たまたまみかける安易な「復刻本」にあきたらなかったわれわれは、初版原本の蒐集と考証、底本の決定、制作上の技術的な問題(製版・印刷・製本)、また資料の吟味などにかかりの時間をかけて、徹底的に調査と研究をおこなってきた。今回の収録作品の初版成立年代を考えると、文化・文政期から昭和にまでおよんでいて、内容的には多岐にわたっている。そのため用紙の特選、装幀資材の特別発注などで、制作陣はしばしば難問に直面しないわけにはいかなかった。

ともかく二年半の歳月をかけて「新選篇」の制作に従事したわけだが、山岳資料についてのあらたな発見もあった。たとえば「名山図譜」の異本をめぐる刊行年代の確認、「鎗ヶ岳畧縁起」の異版発見その他、いくつもの事柄があった。また岩科小一郎氏より「山水無盡蔵」のカバーと、松村寿氏より「富士案内」のジャケットを、上田茂春氏より「歐洲山水奇勝」のジャケットの存在を教えていただいたこともうれしかった。

日本人は古来から山岳の美に芸術的衝動を感じ、また宗教的な敬虔さをいだいてきた。そして近代以後、未知未探の大自然を探って大きな成果をもたらしている。そこには登山文化の多様性があり芸術性があった。このようなすぐれた文化遺産のなかに、学ぶべきことのいかに多いかをあらためて知らされるのである。今回は江戸期の和書類をふくめ、精選集大成する機会にめぐまれたわけだが、登山文化を愛好し、研究するものにとつてありがたいことであった。

ただ残念なことは、松方三郎氏、浦松佐美太郎氏の著作をくわえることができなかったことである。前回からの懸案であった「アルプス記」「たった一人の山」二点は、今回も収録すべく努力したのだが、版元あるいは著作権者の都合

で、それをなしえなかった。

中村清太郎氏の著作をくわえることができたのは、うれしいことのひとつだった。昭和十九年刊行の『山岳渴望』は、前回のときも収録候補としてしばしば話題となったが惜しくも覆刻制作の立場から見おくらざるを得なかったのである。しかし、このたび新編集による一巻選集『山岳礼拝』を山岳書目にくわえることができたのは、まさに望外のごよびと言えるだろう。本書には、初期の山岳紀行を中心に、随想や追憶からその代表的な文章二十七篇をおさめ、あわせて清太郎氏の絵画、スケッチを数多く挿入して、山岳画家としての著者の芸術の一端をつたえることができたようにも思う。

また特別資料として本会の『会報』一〇一号、二〇〇号を一冊の合本として作成、播隆上人直筆になる「鎗ヶ岳絵図」(播隆の生家、富山の山村家蔵)を原寸にて複製した。解題書編集にあたって、執筆諸氏は力のこもった文章をおよせ下さり、四三二ページの大冊となった。巻末に和書類の「解説・訓読」の項目をもうけて読者の便に供することとしたが、今後の研究の一助となれば幸いである。

大修館書店は、前回とおなじく全力をあげてこの覆刻事業をすすめられた。鈴木敏夫社長をはじめ、加藤高伸、望月富士夫、君塚惣一郎、小川益男、池沢正晃諸氏にあつく御礼申し上げます。

内容見本の請求、割賦購入の詳細については、左記に問いあわせて下さるよう、お願いいたします。

〔連絡先〕〒101
東京都千代田区神田錦町三ノ二四

大修館書店開発部山岳名著係
電話〇三―二九四―二二二一番

れた初めての客観さんのためにこのページを抜かして、あとの客には次のページから書き込んでもらっている。

七月十九日のユングフラウ(四一五八メートル)登頂を欠いている横さんの登山年譜もあるが、今

今西錦司先生日本一千山登頂祝賀会

——今西錦司・その人と魅力——

岩 坪 五 郎

七年前、今西さんの七〇〇山登頂祝賀会があり、昨年の一月、九〇〇山記念山行があった。本年一月、今西さんはめでたく喜寿をむかえた。そして、七月三十日、九九山にわたしたはお供して、とうとう八月十三日の一千山登山となった。目標は、大峰山脈の釈迦ヶ岳(一八〇〇メートル)。前夜の祝宴でかなり飲んでいたので、今西さんは快調のピッチで飛ばし、休憩のたびに同行した記者やカメラマンたちにとりかこまれ、登山について、自然について語りながら、高度差一〇〇〇メートルを登り、昼前に頂上についてしまっ

た。

* * *

さる九月二十九日、京都ホテルで標題のパーティが催された。西堀会長、望月副会長はじめ七人の支部長が出席され、参加者は二〇〇余名に達した。まことに盛んな

から数年前ですら、ユングフラウ西面、ロートレットあたりからの稜が未解決であったのだから、当時とられたルートが問題にならないという理由から落してあるとすれば、いささか行きすぎであるように思われる。(以下次号)

祝賀会となり、今西さんはしごくご機嫌で、会場をまわり、参会のかたがたに御礼を述べられた。最後に全員での今西式ヤッホーが会場を圧し、にぎやかに祝賀会の幕を閉じた。

わたしは、この祝賀会の幹事の一人でもあり、今西さんに山登りを教えてもらっている後輩の一人でもあるには違いない。しかし、この偉大な人物、言葉をかえればこのけつたいな人物の人間像を描くことは、まさに難儀な仕事である。わたしにできる範囲で、背のびをしないうで努力してみよう。描かれた人間像が矮少なばあい、それは拙き手の責任としていただきたい。

* * *

「祝賀会に出席」の返事が、ぞくぞくと戻ってくる。北海道から、九州から。「欠席」の返事には、「申訳ない」だけでなく、「残

刊行のことば

西堀栄三郎

日本山岳会が創立七十周年をむかえましたとき、先人の偉大な業績を大成すべく『覆刻日本の山岳名著』全十八点二十二冊を刊行いたしましたところ、各界より好評をいただき、多大の成果をおさめることができました。ひとえに登山文化を愛好する読者諸賢の御支援の賜物と深く感謝しております。

われわれ日本人は、古来より山を愛し、敬虔な想いをいだいてまいりました。そして山に芸術的香気を感じて、かずかずの優れた文学、芸術を生んでまいりました。ヨーロッパに育まれた近代登山術の導入以後、今日の海外遠征にいたるまで、登山文化の多様な発展がもたらされたことは、伝統的な自然観をふまえたつづ未知なるものへの熾烈な探求があったからにほかなりません。温故知新の言葉のとおり、優れた文化遺産を正しく継承することは、あたらしき創造につながるものと信じます。

このたび各界からの御要望にこたえて「新選覆刻日本の山岳名著」全二十点二十九冊を企画、初版原本についての研究考証、資料・印刷等に関する根本的な検討をへて、刊行の運びにいたしました。この文化遺産の覆刻にたいし、山岳人、愛書家はもとより、江湖の絶大なる御支援をお願いする次第であります。

(解題書序文より)

推薦のことば

三 田 幸 夫

日本山岳会編集陣による二度目の山岳名著覆刻版の集大成である。谷文晁の『名山図譜』、播磨上人の『信州鎗岳畧縁起』など、手もとにおいてじっくりと、二百年も昔の山々の姿をしのびたい。

僕自身、この二十点二十九冊中の幾冊かを愛蔵しているが、小島島水氏以降の著者の何人かはその生前親しく面識もあり、特に鹿子木員信氏は、僕のヒマラヤへの眼を開けてくれた先輩の一人である。また、大島亮吉君は若き日のロープ・メイトで、その最後まで畏敬の念を持ち続けた心友の一人である。

そういった先人達が遺した、今日得難い稀覯本の数々が、昔のままの姿に覆刻されて、眼前に現われてくれたことは誠に嬉しい。

渡 辺 公 平

日本の山岳名著ともいふべきものは、前回の覆刻に続く今度の二十点二十九冊で完璧なものとなる。前回の覆刻は近代登山の夜明け以後に絞られたが、今回は夜明け前、わが国における登山の源流ともいふべき、谷文晁の『名山図譜』や播磨上人の『信州鎗岳畧縁起』、松浦武四郎の『石狩日誌』など、明治以前に上梓された興味深い日本人の登山記や探検記も多く選ばれている。どれをとっても入手はおろか、見ることも至難な文献であり、高島北海や河口慧海の名著とともに、原本とそっくりそのままのものがまとめて手許におけるといふことは、なんとも楽しいかぎりである。

念だ」とある。整理しているうちに、わたしは奇異に感じはじめた。ふつう「偉い先生」のお祝いのパーティに出席するのは、その先生にお世話になった人たちだ。ところが、このかたたちは、どうだろう。みな、今西さんが山に登ったとき、そのお世話をし、案内をしてあげた人たちだ。そして今西さんは、「ありがとう。おかげで愉快な登山ができました」とお礼をいうか、天気が悪くて登れなかったときには、むつととした顔で、あまりものいわなかつたにちがいない。このかたたちに、なんの責任もないのに。

今西さんがくるまでに、いちどルートを決めておいたかたも、あるようだし、まずいものでも食べるけれど、うまいものの好きな人だから、それにも気を使わねばならない。北海道や九州、東北からともなれば、京都への交通費はかかるし、一日はお勤めを休む仕儀ともなり、宿泊費もいる。さらに祝賀会費は八千円で、引出物は「一千山のしおり」だけである。たしかにこのしおりは、六〇年間の克明なデータ集積のうえにあり、実に貴重なものであるとはいえよう。しかし、無縁の衆生からみれば、これではどういパランスがとれない。下世話にいえば「泥棒に追銭」である。

となると、この奇異なる関係の解釈のためには、別の要因をいれ

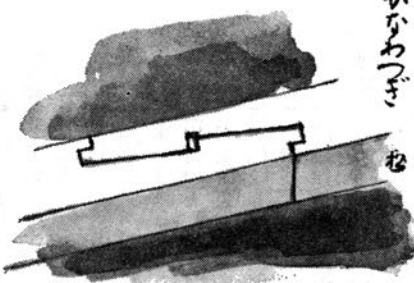
なければならぬ。どうも今西さんは、多くの人たちに、「敬愛」されているらしい。会場での雰囲気からいうと、「敬愛」というより、そんな日本語はないけれど、「愛敬」されているようだ。今西さんへの批評には、「かつてもん」「わがままもん」という言葉がよくきかれる。それでもって、どうして「愛」とか「敬」とかがでてくるのだろうか。

祝賀会がはじまって、西堀会長はじめ、つぎつぎと祝辞を述べられる。みな、今西さんが登山でお世話になったかたたちである。もちろん、祝辞だから、ほめ言葉が多い。しかし、きいているうちに、今西さんも人のせわになつていけるばかりではなくて、なかなか人のお世話もしているらしいことがわかってきた。

関西学生山岳連盟の創立は一九二九年で、そのとき今西さんは入営中だったけれど、水野祥太郎さんや故高橋健治さんの活躍をおおいにバック・アップした。JAC関西支部の設立は、その後六年かかって、やっと一九三五年にできたが、このとき舞台裏で活躍したのが、今西さんと故伊藤藤蔵さんであった。今西さんはまた、一九三〇年、京都大学士山岳会の生みの親の一人であり、本年三〇周年を迎えた京都府山岳連盟、本会岐阜支部の創設者の一人でもある。わたしたちが山登りをするよう

になったのも、今西さんに啓蒙されたところがひじょうにおおきい。そして現在も、今西さんのつくった組織に参加して、山登りをつづけている。このような、祝辞というより、感謝の言葉がきつぎとでる。

「おれは登山をやる。登山はおもしろいぞ。こういうふうによれば、おもしろくて、かつやりやすいのだ」と、今西さんはつねに実



いわれたほうもついつい嬉しくなつてしまつて、「来年もまたぜひおいでください」と、いつてしまふのであろう。

わたしは山にお供するようになった一九五六年頃は、今西さんは登山家というよりも、むしろ探検家とよばれるべき人であつたけれども、けつして登山をおろそかにしてはいたのではない。それは、大興安嶺探検におけるオーコリドイ登山や、アフリカ探検中のルエンゾリ登山、キリマンジャロ登山が証明しているところである。今西さんはまた京大に、全国にさきがけて探検部をつくる努力を惜しまなかつたが、それは登山よりも探検をというのではない。京大士山岳会の会長をつとめて、終始、そのヒマラヤ登山を援助している。

さて、学者としての今西さんは、生物を材料として種社会から生物全体社会までを、人間にかんしては家族から国家までを、伝家の宝刀「棲みわけ」原理でもって、統一的に説明し、ひいては、ダーウインを向うにまわして、壮大な「今西進化論」をつくりつつある。いったい、七十歳をこえてなお衰えをみせない、このような創造的活動と、今西さんの山登りや探検とが、はたして無関係なものであろうか。わたしは断じてそうはおもわない。

西川一川氏の「秘境西域八年の潜行」に、チベットの強盗団が、

「人殺さねば食えず、寺廻らねば罪消えず、人殺しつ、寺廻りつ、進めや、進め」と、いうくだりがある。今西さんのばあいも、まず山に登らなければという一種の「業」のようなものがあり、それを充足させてゆくための行動が、つぎつぎと今西学の糧となり、あるいは芽となつていったのではないらうか。くわしくは、『今西錦司全集』全一〇巻をひもといていただきたい。

今西さんは、理論家ではあるけれども、大学の研究室から一步も外にでないような学者とちがつて、つねに自然へ入りこみ、自然を肌で感得する素質をそなえてい

～79・夏は(7月6日(金)～7月20日(金) 15日間)

ソ連・カフカスの山旅

- エルブルース山 (5,633m) 登頂(希望者)
- 夏山アルペンスキー
- 氷河と花の小旅行、その他多彩!

※カフカスはレーンモントフなどロシア文学の郷里です。

＝ソ連の山と旅の専門旅行社＝

(株) 日ソ旅行社

政府登録一般
第98号

☎ 404-1751代
担当: 石元広昭

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-20-1
パークアベニュービル。

案内書呈



記念碑と挨拶する西堀会長 (撮影・折井健一)

る。その点で、たんなる科学者ではなくて、一面では詩人でもあり、すぐれたエッセイストでもあることができるのだ。さらに「文化功労者」にえらばれたけれども、今西さんを全面的にとらえる

木暮翁生誕記念碑

山崎 安治

本会第三代会長木暮理太郎氏の生誕記念碑除幕式が昭和五十三年十一月三日午前十一時から群馬県太田市寺井地内で行われた。記念碑は秩父古生層三波石の重量八トンという巨石に、本会々長

西堀栄三郎博士の筆になる山登りは先人の肩のつて先へ進むものだ。木暮理太郎翁生誕之地と刻まれた堂々たるもので、寺井四八七番地の生家のすぐ前の蛇川のほとりに建てられた。

碑文は黒御影石をはめこんで刻まれ、裏面にも黒御影石で木暮翁の略伝(別項)が記されている。この生誕記念碑は地元強戸山岳会が、深沢長平氏を建設委員長として設立したもので、碑は赤城山、榛名山からはるか上州、秩父の連山にとりかこまれた絶好の地に建てられている。除

幕式は形通り、神官ののりと始まり、木暮翁の長女美枝子氏と木暮家当主英雄氏長男裕司君によって除幕され、西堀会長は「温厚で、心暖かだった翁の生誕の地にこのような立派な碑の出来たことをお祝いする」とあいさつされ、また美枝子さんは「父がいまでも山を見はらしているように思われ、うれい」と感慨深げにつつましくお祝いの言葉を述べられた。式後近くの寺井会館で木暮家手作りの料理によるパーティがあった。当日は文化の日らしい小春日和に恵まれて、空風の吹く上州の平原の果てには、くつきりと秩父の山々まで手に取るように望まれ、少年時代木暮さんが山の魅力に取りつかれたかをはつきりうかがい知られるような舞台装置であった。地元強戸山岳会の労を多としたい。東京からの参列者は次の通りであった。

貴重なる冊子である。
* * *
△碑文略伝▽
木暮理太郎翁
明治六年十二月七日此の地寺井四八七番地に農家の長男として生れ、当時山岳信仰の盛んな寺井地区の村人に互して赤城山に登る。翁六才の頃であった。幼少の時より山の神秘に魅入られ、生涯を通じて自然を愛し続け、山に対する情熱、経験教養の何れに於ても翁は一世の大先輩の名にふさわしい存在であり、晩年のヒマラヤ研究等翁心血をそそいだ業績は、今尚、日本近代登山の父と斯界より敬慕されている偉大な山男であった。

と書き出されたのを、ふと心付いて眺めた時には、未だ十一、二の少年であった自分も風の糸を巻くことさえ忘れて、磁石に吸われる鉄のように、ひたと眼を引き付けられてしまった。翁が秩父の山に魅入られたこの地に記念碑を建立し、翁の業績を永く後世に伝える。昭和五十三年十一月三日 強戸山岳会
記念碑建設委員長深沢長平、強戸山岳会長金井商、同会員(イロハ順)石原隆雄、石川英司、服部佳郎、横塚操保、高山良一郎、高野昇、中島登、柳常久、山口利夫、山崎恒男、柳文夫、木暮英雄、福田功、木暮家親戚一同 選文木暮仁一、祥斎亀井兼吉書、施工渡辺鉄次
町田立穂氏寄贈図書
去る六月逝去された故町田立穂氏のご遺族から、故人愛蔵の山岳書籍の寄贈がありました。会の図書室にもない貴重本のほか、重複本でも入手困難なものは図書室に残すこととして二百余点の受入れ作業にかかっています。また、入手容易と思われる重複本は、恒例の山岳図書交換会に出品、売上げ金は会の図書出版、研究基金に寄附いただくことになりました。厚く御礼申し上げます。
図書室受入れ分の目録は、追って本誌上で報告します。(図書委員会)



福島支部創立三十周年 記念現地小集会

十月八日～十日。新野地温泉
とぬる湯にて開催。

福島支部は昭和三十二年十二月に、昨年九月物故された前支部長伊藤弥十郎氏等が中心となり、地元会員を糾合して創立されて三十年になるが、今般その記念集会在中島正夫氏の第二代支部長就任と共に吾妻の山々を愛し続けた前支部長の人柄を偲び、この地で秋の最中に開催されたことは意義深いものがあつた。

北海道、秋田、山形、岩手、越後、東海、福岡の各支部から、また東京からは野口、成瀬の長老等、地元中島支部長他多数の参加で盛会となった。

八日(日)午後五時の新野地温泉「相模屋」に集合に先立って、山形から参加の後藤さんと福島駅で中島支部長の出迎えを受けて、伊藤宅をお訪ねし、前支部長の仏前に焼香させていた。

新野地温泉での交歓会は福島支部の長老長尾幸七会員の打ち上げの花火が開会を宣した。吾妻山の夜空を飾って、故伊藤弥十郎氏に捧げられた供花とも覺えた。

中島支部長から懇切な歓迎の辞と今後の支部運営についての抱負が語られ、各支部代表の祝辞に続いて自己紹介、祝盃、献酬と酒の尽きるを知らず、秋の味覚と夜長の交歓を愉しませて貰った。

九日(月)あやしい雲ゆきながら景場平から東吾妻山嶺を探索。姥ヶ原を経て、浄土平に下った。アオモリトドマツの美林帯の間に時折眼のさめるような鮮やかなナナカマドの赤い実が印象的であつた。行き交う登山者はほとんどなかったものの、景場平や展望台など格好な休み場には意外にゴミもなく、この辺りの登山者のモラルが良いのか、管理が行届いているのか、まことに気持ちのよい山歩きであつた。東吾妻山から姥ヶ原への下り路には美事な石楠花の大木がめだつたが、二重三重の花弁を持つという開花の頃はさぞやと思われた。

沢山の炭火の歓待で、建物を取りまく木々の紅葉と共に浮世のうさを忘れさせてくれる心の安らぎを感じた。

夕食の懇談会は、またまた地酒の芳醇に流石に酒処の福島であり、我を忘れると云う方々も多かった。

新野地温泉「相模屋」とぬる湯「二階堂旅館」は共に会員の経営であつて、心からのもてなしに、よく飲みよく喰つて、よく懇親の実も上げた。人と人との交友を最も大切にす日本山岳会らしい集會に終始したが、主催した地元福島支部には感謝の意を表したい。

(地方参加者) 井出貢夫、山川力、高田俊雄、鈴木清、佐藤敏彦、伊達篤郎、高橋憲二、後藤幹次、藤島玄、川北仁、権藤太郎、内海皓也、小林和也、浜野正男、浜野泰子、藤井運平、野口未延、山崎健、原田幹市、成瀬岩雄、川上隆、折井健一

(地元参加者) 中島正夫、武藤清次、河上裕二、安藤治、斎藤啓助、長尾幸七、古市義孝、鈴木嘉、野地克也、遠藤日出夫、逸見征勝、清和良晴、寺島昭一、丹治計二、水上雅、西関良光、川又恒一、宮森常雄、加藤博一、広瀬正弘、吉田元、國分恒司郎、白石(順不同、略敬称)

(折井健一)

●お知らせと報告

第23回山スキー 技術講習生募集

これから本格的に積雪期のスキー登山を志す方を対象にしたスキー技術講習会を企画しました。山スキーの基礎技術から始め、その応用として慶応吾妻山荘を中心として周辺のスキー登山を行います。

講習生の山歴と山スキーの経験や希望に従って班編成をし、講師にはヒマラヤをはじめ海外登山の体験者でスキー登山の経験豊富なメンバーを予定しております。

懇親の意味を含めての講習会で、すてきな男女を問わず参加していただきたくご案内申し上げます。なお、宿泊設備の都合により申し込み受付は30名に限りまのでご了承ください。要領は左記の通りです。

日程 昭和54年2月9日(金)～12日(月)
場所 慶応吾妻山荘を中心とした吾妻連峰

行程 2月9日夜行出発
2月10日 福島駅前集合、バスにて高湯温泉、徒歩にて慶応吾妻山荘着、午後基礎技術練習、夕食後ミーティング
2月11日 吾妻連峰の分散スキー登山、夕食後懇談会

2月12日 午前中スキー練習、午後下山(現地解散)

費用 一人 一万〇〇〇円

(宿泊、消耗品、保険、懇談会費等含む。交通費、食費各自負担)

申し込み方法 日本山岳会事務局で電話にて受付します。TEL 03(二六一一四四三三)、電話受付後申込み書を送付します。受付締切は1月25日。

参加者説明会及び準備会 2月5日(月) 山岳会ルーム。

主催 指導委員会 共催 福島支部

第三七三回小集会 山の歌教室

9月19日(火) 初秋の夕べのひと時、ルームから美しい? 混声合唱のハーモニーが流れました。懐かしい歌、新しい歌……山の歌にまつわる想い出話や安曇節談義まで混じえ、西堀会長の作詩による雪山讃歌の合唱で、楽しい余韻を残して閉会するまでに歌った数は、三十余曲にも及びました。

珍しい歌では、沼倉寛二郎氏より昭和初期の早稲田の歌がご持参のカセットテープで紹介され、興味深く耳を傾けました。その中から昭和二年の針ノ木峠の雪崩遭難者を追悼してつくられた「北アルプスの犠牲」を紹介いたします。

マウント・

ホイットニーから

会報四〇〇号に、アメリカの山岳団体の記録があり、シエラ・クラブのことを知りました。その開拓によるシエラ・ネバタ山系のアメリカの最高峰（除アラスカ）ホイットニー（Mt. WHITNEY 14,480 ft）に、10月5日登頂しました。

ウェスタン・ムードの山麓は、さすがに大でカウボーイの姿も見られ、アメリカの小都市の静かな落着きは思いがけないものでした。

登山基地のローンバインの街に入ったのは灯ともしころで、夕映えの空に連なるホイットニーの山容は荒々しさは消えて、安らぎを感じさせました。

ローンバインの街ではまだTシャツスタイル。中腹には温原地帯があつて黄金色の秋色。富士山の9合目の高度のキャンプ地点では羽毛服とバラエティに富んでいました。

陽気なアメリカ人クライマーに混じってはるばるシャモニから、フランス人のクライマーがザイルを肩に壁登りに来ていました。

日本人は、私たち6名だけでしたが快晴の頂上に立って、アメリカ全土が足の下かと思え

ば、やはり登った価値がありました。（柴田初子）

三水上高地集會

あんころと薬湯でだべる

三水会は九月二日、三日にかけて上高地の山岳研究所で「あんころ餅と薬湯でだべる」現地集會を開いた。

この集會は甘党の折井、沼倉、網藏三氏の肝いりで昨年九月初会合、今年はその第二回、世話役は辛党代表の斎藤健治さん、甘党から関塚の二名、集會は辛党の諸兄にもお汁粉をたべてもらうのが唯一の規則。今年の参加者は三十一名、うち三分の二が辛党というから驚いた。ゲストには信濃支部から高山前支部長、名古屋から川北仁さん、山梨支部の平井さんのお嬢さんも参加という盛会であった。

狭い山研に三十人も泊まれるかと心配だったが、五十歳前後の若者？はシェラフ持参で解決。次は食糧であったが、新装なった松本駅と周辺のスーパーでほとんど調達した。

宴会のご馳走はハムサラダ、豚汁、馬刺し、お汁粉、薬湯（和洋酒多数）、朝食は和洋二種のお好みという豪華版、食事はホテルなみ、泊りは山小屋なみとバラエティ豊かなものとなった。料理はコック長の岩堀嬢と林桂

子さんら女性七人の努力の結晶で素晴らしい出来ばえだった。

演會は肋骨骨折を押して参加した広羽青年を中心に、周囲に美女群、外側に長老と三重の環になり、世話役と若い者はテラスという配置で、なごやかに楽しく進行した。辛党にもお汁粉をおかわりする猛者もいて、翌朝の甘味を楽しみにしていた沼倉さんがガツカリする一幕もあった。おりから半月が六百里からのぼり、さわやかな風に風景は一層美しく「よい環境に旨いご馳走、極楽ですな」と木村さん。「行き帰りの電車も一緒に、こんな楽しいことは久しぶり」という林嬢、初参加のお二人の言葉は世話役には何より嬉しいことであった。

集會を通じて、参加者全員のモラルの高さが会を盛りあげた主因であったと感じた。都合で参加されなかった安曇村の福島村長から大量の安曇まんじゅうの差入れがあり、一同大喜びで賞味した。紙上をかりてお礼を申しあげます。（関塚貞孝）

（参加者）沼倉 高山 網倉 片岡 松本（熊） 高橋（照） 浜田 勝田 坂倉 川北 高田 岩堀 斎藤（健） 木村（俊） 宇津 広羽 菅野 伊藤（信） 坂本（正） 林（桂） 関塚 平井ほか九名

東 西 南 北

北アルプスの犠牲

西條八十 作詩
山田耕柞 作曲

吹雪はやみて 月はいでぬ
扉ほと／＼ うつは風
樺火悲しく 燃ゆる夜半を
帰れ 友よ われら待てり
北アルプスの 岳の雪に
映ゆる朝日の 影をあびて
うたひし友よ 雄々し友よ
あはれ君は いづち行きし
（中略）

北アルプスの 雪の峯々
解けてながるる 春とならば
咲けよ駒草 紅に燃えて
若き四人の 霊のために

（参加者）沼倉寛二郎、宇津力雄、関塚卓亭、平井拓雄、入沢郁夫、高橋清子、武田秋子、小川武、中川 武、小原 俊、河村憲二、佃 和夫、加藤 隆、児玉 茂、池田智津子、新井陽一郎、中沢光、江 塚原道夫、川上和子、和田誠

●図書受入報告

（昭和 52 年 10 月、第 10 回山岳図書交換会ルーム買上げ分）

図書委員会

1. 早川孝太郎著「猪・鹿・狸」文一路社 昭17
2. A.G. ホール著 林要訳「ナンセン伝」岩波書店 昭17
3. 塚本閑治著「雪の上信国境」山と溪谷社 昭18
4. 新島章男著「スキー」朋文堂 昭29
5. 日本山岳会編「マナスル1952〜3」毎日新聞社 昭29
6. 横有恒編「マナスル登頂記」毎日新聞社 昭31
7. 藤田和夫編「カラコルム」毎日新聞社 昭31
8. P. バウアー著 田辺主計 望月達夫訳「カンチェンジュンガをめざして」実業之日本社

9. 昭31 C. ハウストン著 伊藤洋平訳「K2一非情の山一」白水社 昭31
10. 京大探検部編「探検第1号」京大探検部 昭32
11. C. エヴァンス著 島田巽訳「カンチェンジュンガ」朝日新聞社 昭32
12. H. ハーラー著 近藤等訳「チベットの七年」新潮社 昭32
13. 深田久弥著「雲の上の道」新潮社 昭34
14. 毎日新聞社編「毎日グラフ別冊」毎日新聞社 昭35
15. 16. 17. 関西学院大学山岳部編「DAS EDELWEISS」XIII 昭37, XIV 昭40, XV 昭41
18. 明治大学山岳部遭難対策委員会編「遭難の実態」教育図書 昭39

（11ページにつづく）

会務報告

10月理事会

(10月16日午後6時30分)

本会ルーム

▽出席者 西堀会長、望月、折井
各副会長、宮下、高遠、中川、
大森(久)、黒石、越田、田村、
牧野内、嵯峨野各理事、片岡監
事、浜野、金坂、松丸、小原各
評議員

委任 小倉、橋本、鈴木、大森
(兼)、浅田各理事、近藤評議員、
中島委員

▽議案

・秩父宮記念学術賞推薦の件

(宮下)

・科学研究委員会発足の件

(望月)

準備のための経費支出

承認

・学生部ガルワルヒマラヤ登山隊
一九七九の計画 (牧野内)

承認

・53年度年次晩餐会会費値上の件

(高遠)

五千元を六千元とする

承認

▽報告事項

・53年度会計状況中間報告

(高遠)

・会計中間監査報告

(片岡)

・山研 11月12日閉所、(折井)

・ラトック登山隊、ラトックⅢ峰

登頂断念(天候不良のため)

(田村)

ルーム日誌

(8月)

- ・集会 (中川) 9月山の歌を唱う会、今後の行事は予定通り
 - ・高所登山 (田村) 11月11日「高所登山研究会」於海員クラブ
 - ・指導 (嵯峨野) 2月に山スキー講習会
 - ・図書 (越田) 10月21日図書交換会、12月2日この一本展
 - ・会報 (大森) 三五一号―四〇〇号の総索引をつくる
 - ・支部 (折井) 10月8日～10日福島支部30周年記念現地集会
 - 4日(月) 図書委員会
 - 7日(木) エーデルワイス・クラブ
 - 11日(月) 理事会
 - 13日(水) 婦人懇談会研究会、図書委員会
 - 18日(月) 山研委員会
 - 19日(火) 山の歌集会
 - 21日(木) 高所登山委員会
 - 22日(金) 学生部委員会
 - 26日(火) 婦人懇談会集会
 - 27日(水) 自然保護委員会
 - 28日(木) 婦人懇談会研究会
 - 29日(金) 学生部委員会
- 今月の来室者三八四名

図書受入報告

(9ページよりつづく)

19. W.M. コンウェイ 著 吉沢一郎訳「カラコルムの夜明け」あかね書房 昭43
20. H. ティルマン著 薬師義美訳「カラコルムからバミールへ」白水社 昭50
21. 山学同志会編「Jannu '77. 10」山学同志会 昭51

「山」合本、製本いたします

会報三五一号から四〇〇号の合本をご希望の方は、該当会報現物に、製本代と返送郵送料(計二五〇〇円)をそえて、一九七九年一月末日までに、日本山岳会本部事務局あてにお送りください。

昭和五十三年十二月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎

編集代表 大森久雄

電話東京(03)四四三三

振替口座東京三一四八二九番

印刷所

東京都港区赤坂二丁目三番六号

株式会社 技報堂